俳諧百回雀乃跡

特別
へ5
4428

へ5
4428
門
竟
巻

へ5
4428

松壽軒井原西鶴省像

人間五十年乃内を比べ我ら八十のまち
さまざまの人我ら八十のまち
さまざまの人

う義世
志
見る色ハ
月
ふけ
未二年

元祿六年八月十日

勝宜富寫

昭和九年
九月二九日
購求

序

松寿千歳ハ元仏杉といへども西鶴百年の
今ハ雅名を存し〻名唯あるのみ天下乃
人ハ残るを笑ふ翁い唐ゝ時の風流ハ
世ゝ知る所ゝ更ふしゝ尽くも行らねを
大句ハ旅ていつまゝ年ハ元付めく一日
千六百句を獨詠し〻又延寶庚申乃夏
生玉堂前ハ幕うち開を四千句を独吟を
當日の趣後大矢数集元こゝ序直をう

同し時三千風才麿一晶其外名くる流士等
終日数千句一万句さハ追く独吟せしとゝ
さまゝと大矢数流諧と称する遊觴ハ代々羽
世乃り又貞享改元乃呆搆　住吉神ハ和ハ
旅く夏日一晝夜ハ二万三千五百句を独唱
して志ゝも悉く指上ハ弦をせハをゝと
こゝ乃ゝ二万翁と呼へゝと巻頭乃発句

神誠をもゝ〻しく息の根をめよ大矢数

東武乃其角ハ登ゝ西ハあ世延ハ住ゝらハ

蠅そらひ乃吟あるとき乃日茶席式出座法
風客北茶園水の著を進善業よ要し
かくて霍翁の英名一拳千里乃いきおい
有しこの風ふ遊し拜よ隨い北ふ遊ふ
もの貢負を知次とさて又餘力ある時
著述乃和書八十餘部ニ系資生の一助
流家ハ階撈と也祖是當流第二祖也
今歳寛政壬子仲秋十日正當百年回ふ
序ふ以無て志願の事有初祖梅翁と

我師蒼狐と六代乃発句將吉左簾を
加え各石よ彫ふ日暮里の岡補陀山
養福精舍乃境内ふ造立し流徒林
先哲の調を永世不朽よ殘さむ事を
同列乃三子と共ふおもへハ社中ハ諸君
諸風士又ハ荷臍の誼ふしかまあし事も
告まいらせ侯ふ慰助芳志を寄せらき
日ふら侯事成ふ書ハ行言先生侯筆を
倩ひ刻ハ中慶雲ふ刀を命じふ乃侯ふ

嘗て侍る仰ぎ雪節の德化貴し
文雅乃冥加程真人と且知るべし判者たり
月の佳吟を会て一集と[illegible]百田窪乃跡と
題して恵日法蓮の九上に供し言葉の道ハ
稔乃夜叉光を長く四方に伝えられん事を
祈りまいらせこの文字ハ爽秋月乃新久しく
古に止まるべきを奉て一陽井谷素外
拝首百拝書

思せ石に百年の接乃月も新

三

百田鶴乃跡

二祖
二万翁

鯛ハ花を見めぬ里も有りぶみ月
ゆゑ[illegible]百に落る鳥　素外
律の風人乃心や志まるらん　寶馬
射さこの所的も[illegible]の定　津富
なら人数を禮れ品葦乃尽　左簾
ものを畏き富佐嘗こ　宝馬

帳ウ付らを買て山路ふ舩の用　素外
ふと白きえよ日和こゝ波る　左簾
ちりと小き八粉ふ乱る玉露糯　津富
十月十指ふ茅屋ら見世先　素外
人を待ふ相ふ灯乃ふ　宝馬
乃ふ蔵の暑なる　津富
日よ乾く露ふ光の月草ふ　左簾
笑こゝ所閑乃宮居屋の秋　宝馬

四

童部ふ真物ら雖しら　素外
手のらこの人を夾ふ　左簾
晩稙ふ恨乃雪渦ら　津富
蜂ふ巣ふ付し鞍の明神　素外
十壁塗や大工乃業ふ昔今　左簾
かゝらもの丞し結納ふ式　津富
内宮ふ雪乃夜成ら　宝馬
乃ふ大ら御帳やむ　左簾

補陀落や小坂も帝石ハ浪の中　素外
治まる世乃善も目立次　宝馬
危ふう所試座を座の猶ふう　津富
醉人いねて月ハ晴と星　素外
古雅殊号祭を何と岩倉や　左簾
虫も毛と名とを名乗へ　津富
白虹ハ立てもも地下の氣ゝ分ル　寶馬
文車申ものしてゝ家の内　左簾

勧進ウ名のりて通る杜鵑　津富
天のいさ中ハ忠臣乃虚　宝馬
照降を古ゝろみ占の采相場　左簾
今掃中へ状を投ぎむ　素外
咲ホけ日ゝ法法の会　宝馬
発　死皆俱成就乃春　津富

題月

名月や色をよせる木賊刈　兎明
馬牽くうてらハ今宵月の湖　魚冠
更くるやハ仙藥姉らん月乃空　安彦
秋ぬけ夜や月とふものこゝをハ　東李
月ちらひ玉の宮きや雲ぬ輝　息友
大佛も富ふ宵乃月見哉　李谷
月を宵さてハ文一ゑ樹の軍　楚明
月ハ眞如乃玉子と梅花翁の句より
笠ちふ赤き世界や露弦り　沾項

西崖の壺面ふ宗周ち代くの発句乃碑造立ある也

名月や梅乃まちら思ハ立ぬ　十字
名月や仏ふ瑠璃乃ちつ玉　春裡
名月や古き海ぬくを出くし　素月
昔くち今宵月をこの器量よ　如椿
名月や一夜ぬ酒ふをうゝ山　李嬰
玉造の舞臺ふて
名月や押ぬ一世生弱山　艸蛙
名月乃ぬて来ち者やにての四方　始暦
月ちいくひ浮て漂ふものや人　真鯨

名月や爽ハ意せ屋根乃猫　月村

懐舊

風流乃昔きさし月の秋　素纓

歩このまてゝ〳〵月ハ光をゝ　井我

徒ゝ行月よ小さゝや西ハ空　和水

霞こ西寄もたゝや霧ふ百ゝ年忌　春蟻

懐旧　偶作

月乃露ゝ恵むや百年紫末を　紫鳳

ゝきゝうなゝる往昔細工や松乃月　沾山

百雀のむゝ〳〵絵巻の月乃友　雪齋

名月や海ハ果ふいふ云こゝ　冬英

ゝきゝゝと月ふおもゝや古人の意　五陵

思ハ少ゝよ私意ゝ乃ふ発月　古牛呑

（ハ更病中ふ月見を強らるよて今没後なゝゝゝいへゝも加之）

蜘乃関ふ月ハ入ゝこゝの庭の松　平砂

暮ゝき人乃跡追ふ月夜哉　鶏口

題月　追善　懐旧　立碑　偶作

さらい祖翁の志を達する志を　發起

思ひきや陸月や昔乃まきの流き　一陽井社中　栗堂
百年を千年ぬ根組松陸月　雅郊
さらら入る月や世界ぬ月乃富　一鼎
月も露置ぬ夜更ハ月ぬ絶　素芽
入月をさらひ少ぬ島の松　素竹
我新の友ならら陸き月乃前　吐鳳
いはくひや今宵ぬ秋をなぐむ空　素人

八

月あり月を笠よかぶ月を呼　子蓬
乃ぬ月半年ぬまつ磨きてや　素山
蛍ぬ月ぬ月も月ぬ谷ぬと　過橋
配ぬ乃名所くくへかつら新　雀笑
森らきぬ月も赤ぬ菴ぬ安　烏色
新月や乃天窓ぬきて　麥圃
百年乃むのしぬらん秋の月　芦英
さらぬ月ぬ月ぬ弦よけく風　久喜　軽舟
寄ぬ行く夜ハまく涼し旅ぬ月　雀舟

月かげや枝葉まばらくたの林　亀文
おもふなくさけ道清き月乃息　冠雪
世をなかせ今宵の月もまの　文洞
月や今小さとの宗小照る松毒水　江永
水や空うらら又ちる月乃宵　山烏
玉川や昔さらせし　妹法月　何来
思ひや今むかし乃月も向ひ力　素仲
月白と鶴川集むる岩や星　素緑
名月や豆腐の天麩かえ次　素云

月小虫も手向乃新や二万翁　麹人
星のこゑ白小魂ひ月も石　素活
雲りや砂ところ〳〵と淺瀬川　金露
芋壹粉ケ青の下たハ月をう　分香
月小法百味乃木ひ実おのれら　女紫蘭
棹さをや流をよ月の綾瀬川　李克
待つひ月や笑ひ酒乃新　野幣
鶴や鳥し月小ちの多百年忌　芦錐
伏くおもひ見よ高秋ひ月　奥中村素明

六欲を去く真如乃月六くし　冬典
月ふ宿客を去事一百年長　如水
秋毛く乃之の月や月ハ遊　亀全
かうふき八百年清汐月の秋　素翁
的とーくむくみや月ふ句ハ矢数　可笑
秋家中名や廣沢乃池ハ月　素周
月清し形ハ蛙の芸乃浪　長虹
久月やまる白〳〵や小田の鷺　東潮
帳はら乃ふの宮ハりや佃島　一雪

十

京久ともなるこの宗月ハ捨小舟　江又
芝掃ふりも琥珀を玉乃露　芦雀
月ハ雪ふ宮ふ百とせや　楚分
清岩栽宗ー次ハ隅田の月　三曉
露ちきハ新ふ昔ふ松乃り　雪風
肱を曲く我毛の小ものや富ハ月　百志
月ハ出汐青海原と武蔵野を　東林
見ぬらくや秋乃眼ハ月ふの月　羽州素盈
名月やふ人ものむ浪屋風　公佐

谷月や天水桶も掌露盤　素磨
月見まゝ八まらめ昔ゝ思ふ　呉龍
月ハ雲ゝ照ゝを藤乃道の敷　素玉
絶間照る年月新古清水　女遊志
同ふ見えて暑市のさめる月夜弘　菊且
手向ゝふ年も十月ゝ十日月　貴言
谷月ふ笑や此きさを老ぬ新　春瓜
年ゝよ又ゝらさなり秋の月　水蛙
人百年月ハ昔ふかさらめや　己曲

流ゝ思ふい出ゝや月乃思　本子香
照ふや月祇決林乃百樹陰　素尺
幾ゝ節も云ゝ月光ゝや経の月　川町
武蔵野や竹立笹ゝ歌ゝ昔乃り　還童
野路ゝ行ゝ伴申ゝ也乃ふ花ゝ　奉畏
屋根毎の安蔵も申ゝ月ゝ宵　可長
月ゝ雲ゝ清光元天下一　幡乃
うかまゝ式て入ゝを惜むや宵月夜　醉知
名ゝを百年通ゝ矢数や月の弓　藤尺 素曲

名月や湯士みな焚火乃夜もきこえ　櫻男

予うけ句さぢの年沾山の五葉松、入葉せしふ多葉の誤よや
葉もきこえとぞ云もよくてからためて十葉にてこそいのせ侍る

月を友ふ佳の灰老を仁峯の松　桂男

言の葉ハ千代代朽せ次月乃秋　涼山

野も山も月計弓ふ山きくし　素琴女

月中乃毛ものよ形弓ハ山ふ家　春律

山雲て夜毛平魚乃海の月　豊後　冬嶺

たの毛　詠めあ行くある雪ハ　女　賀童

むら鳥乃村雲ふ毛ゆ夜　呉外

象潟のゆゆや西施の夕化粧　徒洲

夕月や庭篁の孔雀色まつの　素絢

草ふ露乃光ア蘇な月夜風　山町

名ゆゆや肥ア毛ハ乎ゆ洞佛　素東

むさゝ毛や関も流ま毛月乃もの　撰枝

碑の文字を毛代あきやうと月ハ　女　星尾

石も垂露や少ゆ〳〵月乃雁　加津

碑も新乃除くゆる一森の月　平布

雪毛見ふ弟ハ毛ハ毛ふ毛ハ　桐生　帰鳳

百とせや君せめ姿発句と月　祇井
月雪に新弾き遊ぶも千代　琴麦
ぬし照月乃ほのぼのや妹の風　花來
月八人のかさよ琴の唱歌よも　千枝尼
せ月に引くこ子よ引きりの三日新　芝水
月一ろや遠来ることも風ひやこ　舟子
満ぬ月と月に手砧や宿乃酒　李冠
りも秋も僧侶いとこ指向ひ　挿繁
月や武蔵く林の下陰も　素悠

作くも月に月の照を今　其莫
名月乃ものや沖の珠　書來
白妙ぬしや清く思ひ月乃歌　素后
月乃ないねてもも思ひ新　和交
大くひ井やも名船よ月見宿　士藤
道云ひ酒酔乃月見も月の夜　住虎
新ないひ蓮見一池小月一輪　唯澄
寄ひ手向今宵うき世月の夜　橘雫
月の夜八幡井ゆるむ山住居　小金井露水

人なくらハ世のうつらむ月を哀　　蟾水
月百年の間むかしの年月の数　　蟾露
清しく性善き水法月　　霞外
初祖ハ梅二祖ハ松の月　　素德
煉るむ月と百年経れ月の前　　素全
かゝるあるハ月の詠めや十日法　　万叶
月ハ酒ゆゑあむ一升百年忘　　慥隆
月を雪松もかゝるもきくら陰　　己禮
照月や天下一面雅乃境　　寛之

新富小浪乃月も除法なる夜　　素潤
太ゆゑ古き昔の月やりんきハ　　素豊
古き月詠めむ松ハ下むしろ　　歌明
百年のおもの月詠ハ月　　傳賤
百と勢ハ月も月ハ名の光　　雀子
月や裡の墨らあハ名ハ天下一　　竹舟
石ふもの中ゆゑ月乃赤　　亀山
照ゆゑ見ハ里ハ月　　玉川 素調
世を思ひ人も十昔十日月　　鎌倉 英富

日蔭の名もはし月乃碑の位置　亀長
月ふきかしらみ衣や芋壱粉　素英
いろふ照を名やりの秋氏世界　鷹雪
百里乃外古人乃月を宴ふ吊　青羅
雲を地ゑ茶や座ゑ世話み月　東水
月の雪降へ事雲も光き夜うら　希言
見て色ふ屋根よ横ゑ枝やかゑ鶯の月　古友
長次月ふ五七乃ゑ紫三五み夜　呉暁
雲ゑ事ゑ事ゑ思い新ふ月乃宿　如淵

白露を玉とあつむやりふの月　路洲
見よ長八月も笑新や世界を　酒未
秋吉く蜂孫ゑ一くゑゑ　鷹朝
月宮や吉ゑ八川もゑや吉島　德富
かの宴一八さく梅ふ二日月　可也
月や芋ゑ月ふ公明ゑく湯し人　李暁
名月や赤ゑ八撓ま月み雪　素溪
公ゑ所人ゑ見よゑや灰中月　伴己
月ふ知ゑや百年前のゑゑ持　行言

題月　同

後五千堂
補助
社中

碑や月乃昔をよこの面し　宝庸
蟬の鬢ぬ少そうやりちらくい　宝驪
名月や笠乃手種の我まくも　江鳥
師ぬ暮よ碑の新踏め月夜か　蒼鼠
人や忘れ丈の石ハうき乃ふ月　鳳尾
浪華江の故人や乃江戸の月　宝驥
今年京浪花ぬ人まり見ねと　蒼鼈
百年乃昔も乃ふを月見うか　眠雀

傾ぬ月の云ふや百年忌　社水
沼ちらむ流ぬや月乃新ら　卜人
紫乃戸を詩く人あて乃ふの月　柏子
名月や浪ぬ乃ろの秋乃海ぬ面　其英
いみへのりや青ぬ叶ぬ　晨風
思ふぬ影や世界をうのハもの　雀声
名月や石ぬも古き島乃跡　可雄
朽ぬ名ぬ月の洗ふや石の文字　如帆
明月や庭よ松あて流ぬ一つ　李朝

名月や流れを伝ひ影をくゞ　湖遊
其姿を作けハ廣しはふの月　髮々

題月　同

うきくもはけて雲間の月を見　補助　姸齋
ゆ　社中　其葉
なつのしき芝居　公嬰
百とせも分てらぬ名や松の月　桃壽
月よ移ハ夜をおもふらし　湘富
詩や哥やいみ〳〵人を月の友　松舍

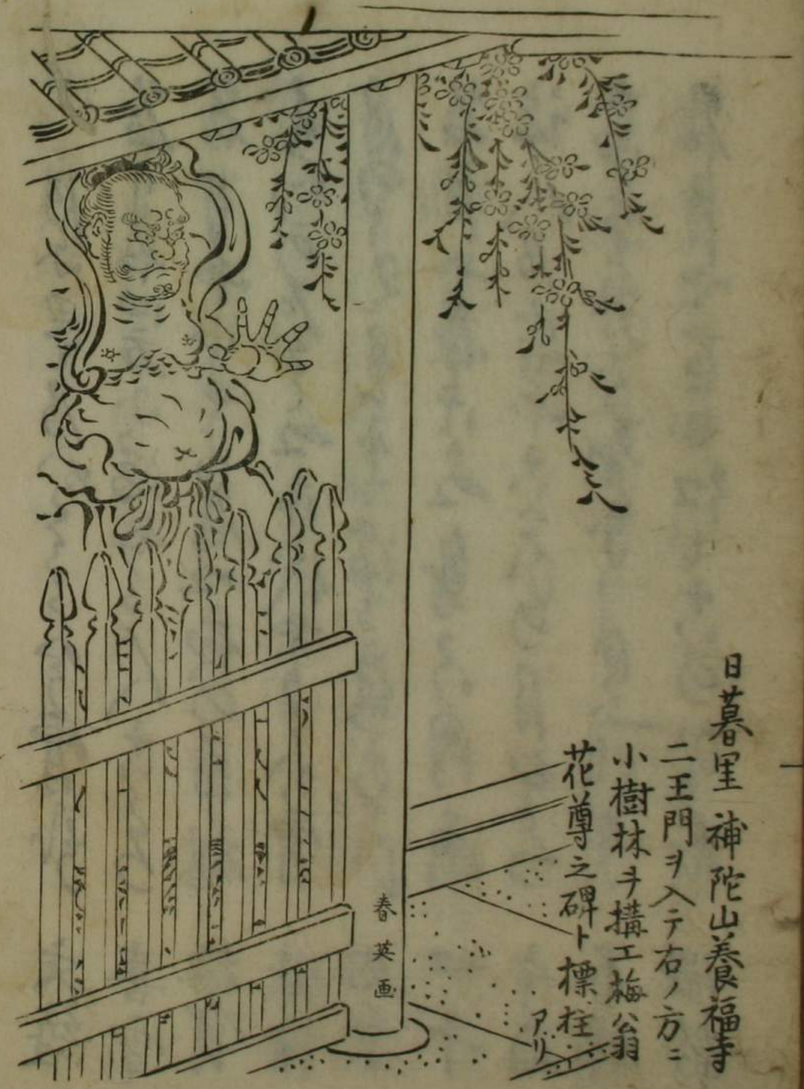
碑や文字ふ照らせる文字の月　蓮子
月や貫いみ〳〵人を今も友　貫時
見るこゝて百とせやすの月孤　沾座
侍乃百と鶴ふ雪あり乃雪　何馬
ちる照や浪花此世月の春　田機
春のうち西月夜烏乃こつてゝ　雨橋
百とせの昔あるつゝ和月と夜　津蛙
西山や月社ふうとの手綿を　芦風
春の自ゝや玉江乃月も廿十秋　懐鯉

元貞生涯月も二萬翁　雀臺
吉道や百里十九月の比　宜富

題月

音羽の滝や樹こもる月今宵　神助　雲齋
名月や幽き見申る雲乃風　社中　伴侶
きぬぎぬや庵の目前まさる目前現　長雅
降露も見申るおもしやりこの月　二鏡
名月や塒をかゝ申る鳥も有　葵黨
如雲

照月ふ星乃かゝる今宵哉　文綾
名りや四方ふ清める人さゝろ　喜雪
名りや少そも春の夜の帰礎　梅賀
ゝ月の左さ也ゝ市代やり今宵　華府
月のゝ光星ゝ清る影さ沢　内業
名月や森さゝ鳥乃図雨　口十
法人乃客や さゝの月ゝ　宇扇
鳥ゝ舟ふ蓬ふ見ふ月　不醉
名月や百日紅もさいのひと秋　環齢



日暮里 神陀山養福寺
二王門ヲ入テ右ノ方ニ
小樹林ヲ構エ梅翁
花尊之碑ト標柱
アリ

○大碑 正面
於我何者哉
江戸ともなく鏡とも出る樽
誹談林初祖 梅翁西山宗因
同 左ノ横
我窓乃松島哉 初ノ句ニ 二祖 松寿軒 西鶴
少々ちら松の命を山ほとゝぎす 四祖 曲菴 玄哲

行ひくると夜乃紅葉や鹿の声　六祖　五千堂　蒼狐

同　右ノ横

時雨うめ黒木よりハ何〳〵も　三祖　狂六堂　才麿

名月や何仏ぬの隅ふ杜宇　五祖　活井　雋室

獨居子訓くかまこのん古とも　曹菴門　古道　左巖

裏ニ七叟ノ号ヲ記ス梅翁百年香ニ出セハ号ス

○副碑　左ニ添テ建但菱形ナリ

表二方　發起　玉池　谷素外

補助　誹諧林總社中

裏二方　寛政壬子仲秋立

石工　中慶雲

○小碑　右ノ方前ヘ五尺計去ル但此碑ハ一阪井社中ノ発起シテ立ル所也

正面

三日月小見て置りの海このゆ　後五千堂　實馬

知る事の八月乃こと我独笑ふ　一陽井素外

夜ふかく秋也名月ふ戸を敲く音　姈齋津富

名月やちらめくて松さくろ左簾　幽雲齋

右ノ横ニ宗肉流畧傳ヲ記ス是亦百年香出ヒ爾之裏ニ

是歳壬子之秋上距井原西鶴翁之没實ニ一百年矣吾一陽井主翁首倡其事ヲ刻ミ

鼻祖洎先哲裒句各一章于貞石碑而傳ヲ爲ニ彰ル求ニ諸公名流之什ヲ別ニ録シ為ル卷ト吾翁原始追遠之志勤矣於是我輩據彼卷中取ニ題更ニ採擇ニ師家四老集中詠ル月ヲ句ヲ對ル大碑之側ニ旌スル其由ニ爾　門人某等謹書

追加

置や露月ふ所ふる石乃艶　視日

名月や未ふも咲ぬ草し花　桐生玉江

新くまむむ未清川の秋乃月　後五年七社中漁舟

時哉二祖二方翁西鶴乃百年回忌に月次
題して其集を著はせる事やはるかに
始祖梅翁宗因ゟ代々の発句の碑
造立せんある事や是発起乃丹誠
神助の感効ともいく倍養の祝儀を
宮ゟ公家ゟ受けて道の法燈を翼と生涯の
修光を赫奕ゟ〻むる事百年法
今日是の[illegible]今日乃百年といふも実に
是はかくもたふとき事を主ゟ新ふものなら[illegible]

芝

花乃初祖月の二祖又西代の秋　寶馬

月乃明らかなるふ向はく雀翁法
遁世の句をおもひ吟ぜまき八百とせ乃
むかしを是世の人は新色形容さも宮ふ
相對し彼らふ公地ぎせらまき待る

月や霊ゟの索月の十る佛　津富

二祖西雀翁折ふまきてハ仮名草紙

なとをも徐らに中ふいみへふ行てる
孟將勇者を味方として爾玉宮裡て
責入筆の飾き世人ふ眞を保させし
方便乃德よさらとて今彼國ふ安樂の
方ならんとおもへハ

桃林の月いや照せ小夜ちのち　左簾

西鶴發句集

巡而梓行